信仰というレース

使徒信条から学ぶキリスト教入門

R・C・スプロール 著
楠　望 訳

いのちのことば社

The Race of Faith
© 2016 by R.C. Sproul

Published by Ligonier Ministries
421 Ligonier Court, Sanford,
Florida 32771 USA
Ligonier.org

© 2016 Ligonier Ministries

使徒信条

わたしは天地の造り主、
全能の父である神を信じます。

わたしはそのひとり子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます。主は聖霊
　によってやどり、
おとめマリヤから生まれ、
ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、
十字架につけられ、死んで葬られ、よみにくだり、
三日目に死人のうちからよみがえり、天にのぼられました。
そして全能の父である神の右に座しておられます。
そこからこられて、生きている者と死んでいる者とをさばかれます。

わたしは聖霊を信じます。きよい公同の教会、
聖徒の交わり、罪のゆるし、
からだのよみがえり、
永遠のいのちを信じます。アーメン。

（教会教育用口語訳、日本基督教団）

栄光を求めて

栄光の追求、それは実に人を突き動かすものです。栄光が手に届きそうなとき、私たちはもっと懸命に、もっと先へ走ろうと努めます。栄光を手に入れるためなら、自分にとって快適な環境さえ進んで犠牲にします。「痛みなくして得るものなし！」と繰り返しながら、さらに前に突き進むために闘います。私たちには、人生が意味あるものであってほしいという願いがあります。何か価値のあるものを追い求め、祝福されたいと願うのです。

私たちがこれほどまでに栄光を強く欲するのには理由があります。神のことば、聖書を読むと、私たちは栄光のために造られたことがわかります。神は私たちの身体を形造り、いのちの息を吹き込まれました。それは私たちが、神の偉大なるきよさを知り、そのきよさをおそれるようになるためです。私たちの心と思いとは、神を礼拝し神に従わずにはいられないほど、神の素晴らしさに深く動かされるように造られています。そうすることで、私たちは驚くべき神の栄光を反映して生きるのです。

しかし、周囲を見回してみてください。この世界は神のきよい輝きに満ちているでしょうか。私たちの世界は悪によって歪められてしまっていることに、あなたも気付いていることでしょう。世の中には苦しみがあり、敵意があり、裏切りがあり、死があります。私たちは神の栄光を知るために造られたはずなのに、何が間違ってしまったのでしょうか。

その答えは神のことばにあります。そして、その答えは、私たち自身の心に目を向けさせます。私たちは神に拠り頼んで生き、神に栄光を帰するために造られました。しかし、私たちは自分自身の栄光ばかりを追い求めてきました。私たちは神のみこころ（ご計画）を自分の願望と差し替え、自分自身の名を上げようと躍起になっているのです。聖書はこれを、罪と呼びます。罪とは、神が私たちに与えてくださっている目的に背くことです。罪は、私たちが神の偉大さよりも、自分のもろさに満足感を得るよう誘惑します。私たちは誤って自分のアイデンティティー（自分という存在）、仕事、夢などに、永遠に残る栄光を見出そうとしてしまうのです。しかしそれでは、自分が空っぽで満たされないことに幾度となく気付くばかりです。それだけでなく、私たちは神が決して私たちの罪を見逃されないことにも気付きます。神は正しい裁判官です。自分自身を確立することに夢中になり、神の真理を無視してきた私たちは有罪です。この罪の報いは、実に明確に記されてい

ます――死、そして永遠に神から引き離されることです。

しかし、福音のメッセージは栄光に満ちた良い知らせです！聖書にはこう書かれています。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは、御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」。完全なる神の子、イエス・キリストが、罪を持たない人となってくださいました。イエスは人々の間に住まわれましたが、彼らの不従順には加わりませんでした。イエスは神のみこころを求めること、そして神の御名に栄光を帰することを貫かれました。イエスは神の栄光を完全に反映しておられたのです。

聖書は、イエス・キリストが「死にまで、それも十字架の死にまで従われ」たと述べています。イエスの従順は、結果的に十字架の死を招いたのです。なぜでしょうか。

答えはこうです。イエス・キリストは、私たちに対する罪の定めを背負われたのです。イエスは私たちの死を死なれました。それによって私たちが生きるためです。イエスが受けてくださった罪の罰の苦しみは、私たちが受けるべき苦しみでした。イエスが私たちの罪を背負われたのは、私たちが赦(ゆる)しを知るためです。イエスがご自身のいのちをささげられたのは、私たちが神に受け入れられるためです。イエスが死なれたのは、私たちが罪を

告白し、主によって贖(あがな)われるためです。これは、驚くほど不思議で栄光に満ちた知らせではないでしょうか。イエスが死なれた三日後、イエス・キリストはよみがえられました。イエスは罪の定め、死と罪とに打ち勝ち、復活されたのです。

聖書はこの良い知らせについてこのように記しています。「こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」。イエスにある者は、赦(ゆる)しと希望と平和、そして心の満たしが与えられます。イエスにあって、私たちは神の臨在の前に喜んで受け入れられ、神の愛ときよさの美しさを改めて発見します。これが救いです。これこそ、真の栄光です。これが、福音なのです。

愛する皆さま、あなたは自分の罪を告白し、イエス・キリストを信じましたか。あなたは私たちの救いの道であるイエスの死と復活に、進んで信頼しますか。あなたも今日救われることができます。神はあなたを赦(ゆる)してくださいます。

私たちはこう祈ります。どうぞあなたが、イエスを信じ、イエスの栄光があなたを真に満たしてくださることを知ることができますように。

目次

使徒信条……3
栄光を求めて……5
第一章　人生というレース……11
第二章　信仰とは？……19
第三章　父なる神……26
第四章　キリストというお方とそのみわざ（前半）……31
第五章　キリストというお方とそのみわざ（後半）……37
第六章　聖霊と教会……46
第七章　罪の赦し、復活、そして永遠のいのち……53

第一章　人生というレース

多くの人がそれは不可能だと言いました。挑戦する者は皆、あともう少しというところで記録を更新できません。ゴールはもう本当にすぐそこなのに、どうしても手が届かないのです。一マイルを四分以内で走る――これは中距離走者の夢でした。一九四五年以来、記録は四分一・四秒止まりでした。一九五〇年代初頭には健闘する走者が次々と登場し、オーストラリア出身のジョン・ランディ、アメリカ合衆国出身のウェス・サンティーなどが、四分三・六秒、四分二・四秒、四分二・〇秒と、僅差の記録を出していました。徐々にタイムが縮んでいくのを見ながら、イギリス出身のランナー、ロジャー・バニスターはこう確信しました――記録に挑戦するなら、先延ばしにしてはいられない。

有望な若手アマチュア選手であったバニスターは、一九五二年にフィンランドのヘルシンキで行われたオリンピックで一五〇〇メートル走の人気選手の一人でした。しかし予想に反して準決勝の一試合が急遽加わり、バニスターは決勝に進出したものの、追加された

レースでエネルギーを消耗してしまいます。決勝は接戦の末、四位という残念な結果に終わりました。

そこでバニスターは、ある選択に迫られます。彼は、自分があまりに若く経験が浅いことを懸念して、一九四八年のロンドンオリンピックの出場を見送っていました。その間に彼は医学の道に進んでいたのです。フルタイムで働く医師としての仕事量が増えたことで、彼は一九五六年のオーストラリア・メルボルン大会に向けてのトレーニングが十分にできなくなる可能性がありました。彼は陸上を諦めるかどうかの決断をしなければなりませんでした。二ヶ月間悩んだ末、彼は一マイル四分の壁を超えるという目標を立てることにしたのです。

一九五三年の間に数回レースに挑戦した結果、十分記録に近づいたため、彼は四分の壁を超えられる確信を得ました。そこで、一九五四年五月六日、バニスターはイギリスのオックスフォードにあるイフリー・ロード・トラックでの大会に出場します。彼はアマチュア陸上協会（ＡＡＡ）から出場し、オックスフォード大学と対戦しました。この日は肌寒く、強風の中、雨が降っていたため、悪条件のレースになるおそれがありました。

バニスターは、研ぎたての、かつ土の破片が溜まらないよう黒鉛でコーティングしたラ

ンニングスパイクを履いて、会場に入りました。レース開始の午後六時が近づくにつれ、彼は天候が心配でレースを棄権することも考えましたが、彼のコーチはこの日こそバニスターに与えられた最高のチャンスだと確信していました。レースが始まる少し前に風が静まるのを感じたバニスターは、このレースに挑戦する決心を固めました。

フライングが続き緊張が高まる中、ついにレースが始まりました。バニスターは彼の前半二周のペースメーカー（訳注―中距離・長距離走で選手の少し前を走り引っ張る役割）、クリス・ブラッシャーの後ろについて走ります。彼らがちょうど中間点に差し掛かったとき、タイムは一分五八秒。ブラッシャーが退くとともにクリス・チャタウェイが後半のペースメーカーとして役割を引き継ぎ、バニスターを引っ張って三周目をスプリットタイム三分〇・〇七秒で終えさせました。バニスターはここから最終周を五九秒以下で走りきらなければなりません。

チャタウェイは最終コーナーまでバニスターをリードした後、自身は退いて最後の追い上げをバニスター一人に託しました。バニスターは最後の力を振り絞って二七五ヤード（二五一・四六メートル）を走り抜きました。ゴールテープが近づいてくると、彼はフィニッシュラインをそのままの勢いで通過し、そして力尽きて崩れ落ちました。

スタジアムのアナウンサーが、期待に胸を膨らませて待つ観衆の緊張を高めます。ついに、アナウンスが流れました。「タイムは、三分……」

その声を最後まで聞き取った者はいません。観衆は一斉に歓声を上げ、バニスター、ブラッシャー、チャタウェイは勝利の一周を走りました。不可能な夢が達成されたのです。ロジャー・バニスターの四分は、陸上競技界において栄光に輝く功績でした。彼の努力、綿密な計画とトレーニング、そして強い意志は、私たちに多くを教えてくれます。これらの賜物は、バニスターの競技人生だけでなく、医師としての人生にも大きく影響を与えました。

このような賜物は私たちの人生においても大きな助けとなります。つまるところ、人生はしばしばレースにたとえられてきました。スタートとフィニッシュがあり、その間に費やされる多くの努力があります。もし人生が、私たち誰もが走るべきレースだとしたら、ゴールは何でしょうか。フィニッシュラインには、一体何が待っているのでしょうか。人生には困難もあります。疲れることや休みたいこともあります。しかし私たちは、それでも突き進むのです。しかし、何に向かって突き進んでいるのでしょうか。

歴史の中で、ほとんどの人が何らかの死後の世界を信じてきました。カルマや輪廻転

生（しょう）など、死んだ後はもう一度新しい命を得て無限のサイクルを生きること、一つの人生での行いが次の人生での地位を決定することを信じる人もいます。また多くの人は、天国など何らかの幸福の状態を信じています。ただそこにどうやってたどり着くかについては、答えが異なるのです。

クリスチャンにとって、これらの疑問の答えは聖書の中にあります。聖書は歴史上最も売れている本です。それには理由があります。聖書は神のことばで、神が人に与えられた完全かつ権威に満ちた啓示です。この本には私たちが得るべき重要な知識があり、私たち誰もが抱えている疑問に対する答えもあります。聖書は、人生という名のレースを走るために、私たちがたどるべき道を示す地図です。

聖書を開いてみると、大きく二つのセクションに分かれていることに気付くでしょう。旧約聖書と新約聖書です。この二つの区分の中には、およそ千五百年の間に多くの人によって書かれた六十六巻の小さな書が含まれています。これらの書の内容は様々です――歴史、預言、詩、系図まであります――が、すべて神とその民との関わりを物語っています。

旧約聖書は、イエスが世に来られる前の神の民の歴史です。そこには人々の様々な成功と失敗が語られ、まるで彼らの喜びの声や泣き叫ぶ声が聞こえるようです。神は彼らの不

従順を罰せられ、また彼らを敵から救われます。それらすべてを通して、私たちは神がご自身の民を愛される様子を見、また来るべき救い主によって、神が彼らを完全にかつ最終的に救ってくださるという約束を聞くことができます。

この救い主とは、イエス・キリストです。イエスは二千年前にパレスチナ地方に住む一人の人間でした。しかし、イエスはただの人間であったのではありません。イエスは、肉体を持った神でした。新約聖書にはイエスがどのようなお方で、地上で何をされたかが記され、またイエスが天に上げられた後は、主に従った者たちが言ったこと、話したことが記録されています。

このイエスこそ、キリスト教信仰の中心におられるお方です。イエスがどのようなお方で、ご自身の民のために何をされたかという記述は、福音（gospel）と呼ばれます。これは、「良い知らせ（good news）」という意味です。なぜ「良い」かというと、福音は私たちが罪から解放され、神との和解が得られることを教えているからです。そのため、クリスチャンは死んだ後、神と共に生き、終わることのない喜びの中で永遠に神をほめたたえることを希望としています。そして、愛と恵みの神は、人と神の間に大きな隔たりがあったにもかかわらず、福音を通して私たちが神と共に生きることのできる道を備えてくださ

いました。その道とは、イエス・キリストを信じる信仰です。

イエスに従った者たちの一人で、新約聖書の多くの書を書いた使徒パウロは、こう記しています。「私は……ただ捕らえようとして追求しているのです。そして、それを得るようにと、キリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです」（ピリピ人への手紙三章一二節）。パウロはここで、死後のいのち、天国での永遠の喜びについて話しています。彼の力の源にあるのは、イエス・キリストです。彼が前へ前へと進むのは、彼がイエスのものだからです。彼の人生はイエスによって全く変えられたので、彼は新しい目標をもって生きるようになりました。

クリスチャンの人生は、イエス・キリストへの信仰に基づいています。これは、クリスチャンがクリスチャンと呼ばれるために必ず信じなければならないことがあることを意味します。キリスト教信仰の中心は、イエス・キリスト――イエスがどのようなお方で、地上に生きられた間に何をされたか――です。教会の歴史を通して、クリスチャンたちは顔と顔を突き合わせ、聖書が教えていることに基づいて、自分たちが何を信じているかを正確に系統立てて説明する宣言文を作ってきました。このようなキリスト教信仰の要約は、信者にとっても信者でない人にとっても、クリスチャンになることの意味を理解する助け

になります。

このような信仰の宣言文のうち、最も古く最も重要なものが、使徒信条です。使徒信条が作られたのは紀元四〇〇年頃だと言われています。これは、イエスの時代の三百年ほど後のことです。使徒信条という名前は、イエスに従い、イエスの働きを引き継ぐ者としてイエスによって任命された、使徒たちの教えをまとめたものであるということを示しています。

本書では、ここから使徒信条を理解しやすいように説明していきたいと思います。要点を順に押さえて、この信条を吟味し、その意味を明確にしていきましょう。これを読む方が、明確かつ簡潔にキリスト教信仰の基本を理解し、キリストを信じる信仰によって、そして聖書の教えによって人生というレースを走るとはどういう意味なのかを理解することを目指したいと思います。

第二章　信仰とは？

わたしは天地の造り主、
全能の父である神を信じます。

使徒信条は、「わたしは……信じます」という文章から始まります。「信じます」と言うことは、どのような意味を持つのでしょうか。よく似ている言葉として「信仰」があります。信仰を持つとは、どういう意味でしょうか。信仰はキリスト教に必要不可欠なものであるため、キリスト教自体が「キリスト教信仰」と呼ばれることもあります。キリスト教を理解するためには、何かを信じること、また信仰を持つということの意味を理解する必要があります。信仰は、理性や感覚的認識（味覚、視覚、触覚、嗅覚、聴覚）とは正反対のものとされることがよくあります。つまり、信仰は私たちが物事を学ぶ他の方法とは対立関係にあると捉えられがちです。多くの人が、信仰は理性や感覚的認識を否定するもの

であるため、真の信仰を持つためには理性や感覚的認識を手放さなければならないと考えます。しかし、聖書はそのように教えていません。むしろ聖書は、理性も感覚的認識も含めた、知識の基礎であることがわかります。信仰はこの基礎の上に立ち、さらにはその限界を超えるところまで私たちを導くのです。

これを聞いて不思議に感じる人もいるかもしれません。なぜなら、多くの人は信仰を知識とは全く別のものとして、離して考えているからです。しかし、もしあなたが知性で理解できないとしたら、どうやって神の知識を得ることができるでしょうか。

クリスチャンの信条の中でも最も古いものの一つは聖書に記されています。それは、「イエスは主です」という、実にシンプルな証言でした。この言葉を、意味を理解しないまま口にすることも可能です。「主」が意味すること、「は……です」が指し示すこと、「イエス」という名前の意味するところも、何もわからないまま、この言葉を繰り返すこともできるでしょう。しかし、もしあなたがこの言葉を意味を知らずに口にするなら、この言葉の意味を本当に証言していることにはなりません。あなたは真の信仰告白をしていることにはならないのです。ですから、福音を信じるには、またイエスを信じる信仰を持つには、まず福音のメッセージをある程度心で理解していなければなりません。

また、キリスト教は、私たちの理解のために構成された教えや教理の本を持つ信仰であり宗教です。書物という形の教えを持つ以上、その信仰が理性を全く無視するものであるはずがありません。書物は人々に確信を与えるためのものであり、人々が理性を用いて書物のメッセージをよく考えるよう促すものです。従って、聖書に書かれている信仰とは、決して「盲目の信仰」ではありません。目をつぶったまま飛び込むのが信仰なのではありません。それよりも、聖書は私たちに目を開いて現実を見よ、と招いています。聖書は私たちを暗闇の中から光の中へと導き出すのです。

しかしその一方で、理性だけでは誰も福音を信じるようにはなりません。また感覚的認識だけでも、同じでしょう。聖書にはこう書かれています。「信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです」（ヘブル人への手紙一一章一節）。信仰には、私たちが見たり、聞いたり、触ったりできないものが含まれています。神を見た者は一人もいません。私たちは天国を見ることもできません。しかし、被造物の中に神の御手によるみわざを見ることはできます。

キリスト教は、いわゆる「啓示の宗教」です。クリスチャンは、自然界を通してご自身を現される神を信じ、それと同時に私たちに語られる神の言葉を信じます。目に見えない

ものを確信させるものが信仰であるというのは、神を信じるということ、そして聖書の中で神が私たちに啓示してくださったことを信じるということを意味します。これは決して、非理性的な信仰、または非科学的な考えではありません。クリスチャンの信仰は、実際に起こった歴史的事実、科学的・感覚的に検証できる事実に基づいています。

ですから、私たちが「わたしは……信じます」と使徒信条を告白するとき、私たちはキリスト教と聖書の示す事実を受け入れます、と証言しているのです。これは盲目の信仰ではなく、生きた本物の信仰です。聖書的な意味での信仰の真の対極にあるのは、理性や経験ではなく、すぐにだまされたり迷信を信じたりすることです。

キリスト教が信仰中心を強調することはとても大切です。一六世紀に起こったプロテスタントの宗教改革は、この問題を巡ってのことでした。マルティン・ルターを筆頭に、多くの人々が、私たちが神の前に義と認められ正しい者とされているのは信仰によるものであり、信仰のみによるものであると訴えました。

ここで一つ疑問が浮かび上がります。果たしてどんな信仰なら、義と認められるのでしょうか。新約聖書のヤコブの手紙には、行いの伴わない信仰は死んだものである、そのような信仰は人を救うことができない、と書いてあります。ルターが言ったように、救いを

もたらす信仰は生きた信仰です。つまり、救いを得るためには、私たちは生きた信仰を持たなければなりません。しかし、そのような信仰には何が含まれるのでしょうか。

宗教改革の指導者たちは、聖書的な信仰には少なくとも三つのはっきりと見分けられる要素があると教えました。一つ目は、私たちの信じる内容です。心から信じてさえいれば何でもよいというものではありません。救いをもたらす信仰は、聖書の内容に基づくものでなければなりません。

新約聖書には、救いの信仰の基本的な内容――キリストは神の子であること、キリストは救い主であること、キリストは私たちの罪のために死なれたこと、そして死からよみがえられたこと――が記されています。使徒たちはこのことを宣(の)べ伝え、人々にこれらについて信じるよう勧めました。この内容を信じるには、誰でもまずこれを知り、理解しなければなりません。

救いをもたらす信仰の二つ目の要素は、知的同意です。知的同意とは、あることが真実であると受け入れることです。例えば、私がこう尋ねるとします。「空は青いと信じますか」。私は単純に、「空は青い」というのは真実だとあなたが信じるかどうかを聞いているのです。あなたが「はい」と答えたら、あなたはこの言葉に知的同意を示したということ

になります。同じように、初期のクリスチャンたちはこう尋ねました。「あなたはイエスが神の子だと信じますか」。これに、「いいえ」と答えた人もいましたし、「はい」と答えた人もいました。しかし、「はい」という言葉だけでは、救いをもたらす信仰には不十分です。何しろ、悪魔でさえイエスは神の子であると認めていると、聖書には書いてあるのですから。

ここに、救いをもたらす信仰の三つ目の要素が関わってきます。それは個人的な信頼と愛を含む要素です。あなたはイエスが神の子であるということを、聖書に記されている知識として知っているだけではなく、それが真実であることを信じ、さらに、そのことを愛をもって慈(いつく)しみます。あなたはイエスというお方を感謝して見上げ、喜んでイエスに信頼します。キリストにあって救いをもたらす信仰を持っている人は、かつてイエスから離れて敵対していましたが、今はイエスを愛し、イエスをあがめる人です。

誰かが、「私は……信じます」と言うとき、それはその人が心と思いを尽くして、キリストの勝利と栄光を慈(いつく)しむことを意味します。これが信仰告白です。私たちはただ、内容に同意するからというだけで使徒信条を暗唱するのではありません。信仰は、知識や知的同意以上のものです。しかし、知識や知的同意以下のものでもないことを覚えておいてく

ださい。

第三章　父なる神

わたしは天地の造り主、
全能の父である神を信じます。

キリスト教信仰の中心は、イエス・キリストです。従って、最も古い使徒信条はイエスというお方に焦点を当てています。また、初期の回心者のほとんどはユダヤ人でした。彼らには、父なる神に対する信仰はすでにあったため、彼らに必要だったのはイエスに対する信仰を確認することのみでした。

しかし、紀元一〇〇年になる頃には、より多くの非ユダヤ人たちが教会に流れ込んできました。するともはや、回心者たちに唯一神信仰、または神は唯一であるという信仰に対する、明確な理解があるという前提があやふやなものとなってきたのです。回心者の多くは、それ以前には多くの神々を信じる信仰を持っていました。ですから、ある程度の基本

的な教えが必要になったのです。

当時、新しい回心者が洗礼を受けるときは、一連の質問をすることになっており、これらの質問が使徒信条の土台となっています。この場合、初めにまずこう質問します。「あなたは、全能の父である神を信じますか」

父とは、旧約聖書の中でご自身を現される神です。後に来られたイエスは、決して父の代わりとして、また父より優れた存在として来られたのではありません。イエスは父について宣(の)べ伝えるために来られたのです。新約聖書の歴史上のイエスと、旧約聖書の父なる神との間には、親密な関係があります。

キリスト教は、その最も初期の段階から、意識的に三位一体を主張してきました。神には三つの位格――父、子、聖霊――があるということを明確にしています。使徒信条もそれを繰り返し述べています。「わたしは……父である神を信じます。わたしはそのひとり子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます。……わたしは聖霊を信じます」。この初期の使徒信条の中に、三位一体の三つの位格すべてが告白されているのがわかります。

父なる神に対する信仰は、キリスト教信仰の基盤と言えます。それにもかかわらず、神の父性は誤って理解されることが多くあります。一九世紀に、キリスト教を再定義しよう

という動きがあり、彼らはより良い理解のために本質以外の部分を削ぎ落とそうとしました。結果、彼らはキリスト教は二つの中心的な肯定事項から成るという結論に至ります――父なる普遍的な神と、人の普遍的な兄弟愛です。これは、神の無差別博愛における全人類の連帯という考えから生まれています。しかし、聖書的な観点から言うと、この結論には問題があります。

この考えに至らせる可能性として、聖書の一節が挙げられます。使徒パウロがアテネのアレオパゴスでギリシャ人の哲学者たちと議論していたとき、彼らの哲学者の言葉をこのように引用しました。「あなたがたのうちのある詩人たちも、『私たちもまた、その子孫である』と言ったとおりです」（使徒の働き一七章二八節）。ここでパウロが意味したのは、神はすべての人間の創造主であられるから、神は全人類の父であると言うことができる、ということです。しかし、キリストを信じていない人でも、すべての人が神を愛の神として見ることができるという考えはどこにも見当たりません。

また同様に、人の普遍的な兄弟愛というものも聖書の中には見当たらないのです。代わりに聖書は、私たちは誰もが隣人（となりびと）である、そして私たちは自分を愛するように隣人（となりびと）を愛せよ、と教えています。一方で、兄弟愛というのは人間同士の交わりの中でも特別なもので

す。このような愛は、神の子であるイエスが、真に神を父としているという前提に根差しています。それと対照的に、私たちは神の家族の養子として受け入れられて初めて神を父と呼べるのです。私たちが信仰によってキリストを救い主として受け入れるとき、この変化が起こります。本来、私たちは神と神の家族から離れていましたが、キリストを通して神との和解を得ることができます。

従って、私たちが人の普遍的な兄弟愛や神の普遍的な父性について主張することは、キリストがご自身を信じる者に備えてくださった特別な関係を曖昧なものにしてしまうことになります。イエスに敵対する者たちは、神を自分の父と呼ぶことがいかにとんでもないことかを認識していました。事実、イエスが神を父と呼ばれたとき、それは神への冒瀆だとして、人々はイエスを石で打ち殺そうとしています（ヨハネの福音書五章一八節）。

主の祈りの中で、イエスは弟子たちに「私たちの父よ」と祈るよう教えられました。これはイエスが、父との間にある親密な関係に彼らを招いてくださったのです。これは全く新しい捉え方でした。しかし今日のクリスチャンたちにとって、神に対して「父よ」と祈ることがあまりにも当然のことのようになってしまったため、私たちはそれを特別なことと考えず、神を父と呼ぶことの重みと特権を忘れてしまっています。

もし、宗教の本質が神の普遍的な父性と人の普遍的な兄弟愛だとしたら、私たちが神の御前に立ち、神に対して「父よ」と呼ぶことが許される、その招きの重大性は失われてしまいます。もし神がすべての人の父であるなら、私たちが父なる神と楽しむ親密な関係は曖昧なものになるでしょう。神はもはや私たちから離れた、非個人的な存在となります。しかし、キリスト教は、私たちと個人的な関係を持つ個人的な神の存在を肯定しています。私たちが祈りをささげるときも、それは非個人的で離れている神に対する祈りではなく、近くにおられ、私たちが知ることのできるお方にささげる祈りです。

この神は、最も古いユダヤ人の宗教の中で、「全知全能のお方」として理解されていました。創造主である神は、イスラエルを贖(あがな)われただけでなく、天と地を創造されました。もしそうならば、神の権威は、パレスチナ地方という地理的境界線を超えて全世界に及びます。「全知全能」という言葉は、神が全世界を支配する主権者であられるという概念に根差しているのです。

第四章　キリストというお方とそのみわざ（前半）

わたしはそのひとり子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます。主は聖霊によってやどり、
おとめマリヤから生まれ、……

イエスが生きておられた当時、私たちが「イエス・キリスト」として知っているお方はおそらく「ヨセフの子イエス」または「ナザレのイエス」として知られていたことでしょう。当時人々には名字というものが無かったため、その人の父親の名前や出身地を加えることで個人を区別していました。「キリスト」はイエスの名前ではなく、称号です。しかしこの称号は非常に重要であり、新約聖書の教えの中核部分であるため、イエスの名前と称号が徐々に密接に結び付きました。その結果、私たちはしばしばキリストというのがあたかもイエスの名字であるかのように捉えてしまうことがあります。

使徒信条の中でも最も多くの部分は、イエスというお方、そしてイエスの成されたみわざに焦点を当てています。そしてこの部分は、この最も重要な称号が示されるところから始まるのです。初代教会がイエスを「キリスト」と呼ぶとき、それは使徒ペテロの「あなたは生ける神の子キリストです」という信仰告白に倣うものでした。新約聖書のキリスト（Christ）という言葉は、christos というギリシャ語からきています。christos はヘブル語の言葉、mashiach の訳であり、メシア（Messiah）を意味します。キリストもメシアも、両方「油注がれた者（the anointed One）」の意味、つまり神のご計画のために特別に聖別された者を指します。旧約聖書では、メシアという言葉は人々を救うために来られる待ち望まれた救い主を指しています。

従って、クリスチャンが「わたしはイエス・キリストを信じます」と言うとき、彼らはイエスが長く待ち望まれたメシアであることを告白しているのです。この、「イエスはキリストです」という告白こそ、新約聖書のイエスの宣教の中心となるものです。

旧約聖書では、メシアに関してはいくつかの異なる期待がありました。一つはモーセのように、人々を救い出し新しい契約の仲介者となる、典型的な指導者に対する期待です。預言者イザヤは、イスラエルの苦難のしもべ――人々の罪を背負う主のしもべとなる人が

現れると預言しました。また、ダビデ王の家系からメシアが出るとの期待もありました。旧約聖書の終末論的な文書、特にダニエル書などには、世界をさばくために遣わされる天上の存在が約束されています。

このように、メシアに対する見解が様々にある中で、これらがどのように一人の人物に収束されるのかと考えるのも無理はないでしょう。しかし、新約聖書では、これら一つひとつの見解が、明確にイエス・キリストの生涯とその成されたみわざに集約されているのがわかります。イエスは預言者の役割を果たすために来られ、王としての役割を成し遂げ、大祭司としても仕え、そして人々の罪を背負う苦難のしもべにもなってくださいました。使徒信条は、イエスが他に類のない別格の存在であられることを証言しています。ロジャー・バニスターが一マイル四分の壁を破ったとき、彼は人類史上初めて一マイルを四分以内で走った人間になりました。一時（いっとき）の間でしたが、彼は特別な存在になったのです。今までどの人間も成し遂げたことのなかったことをしたからです。それ以降、多くの人が彼の偉業を真似てきました。しかし、バニスターのしたことで他の人々に決して真似できないことが一つあります。それは、最初にその偉業を成し遂げることです。イエスは、父のひとり子と呼ばれています。つまり、イエスは比類のない存在なのです。イエスのようなお

方はほかにありません。クリスチャンたちは神の子どもと呼ばれますが、それはイエス・キリストのみわざによって私たちが養子とされたからに過ぎません。ですから、イエスだけが、本来から神の子であられるお方です。

イエスはまた、「わたしたちの主」と呼ばれます。教会の最も古い信仰告白は、「イエスは主です」という実にシンプルな証言であったことを覚えていますか。新約聖書での「主」という言葉には、様々な意味があります。これは、ユダヤ人が父なる神のみに対してほぼ独占的に使った言葉を翻訳したものです。彼らは神への冒瀆（ぼうとく）となることを恐れ、神の名前を口にすることを避けました。そこで代わりに、「主」と呼んだのです。ですから、初代教会がイエスを「主」と呼んだのは、彼らがイエスに神性を認めていたということです。彼らはイエスを、天と地を創造されたお方として、また全被造物を支配されるお方として、認識していました。「主」は王政を表す呼び方です。主とは、主権を持っておられるお方であり、絶対的な主権は神のみが持つものとされていました。

使徒信条は、イエスに対するこれらの称号について簡単に述べた後、イエスの生涯の概要を一気に伝えています。これは重要なポイントです。なぜなら、イエスがその生涯においてどのようなお方であったかが、イエスのみわざを定義付けているからです。その内容

は、イエスの処女降誕を宣言することから始まります。教会の歴史の最も初期から、イエスの処女降誕は教会の信仰告白の中心にありました。この宣言が必要不可欠であったのは、使徒たちが処女降誕を宣(の)べ伝えていたので、彼らの証言の完全性が危ぶまれる恐れがあったという理由だけではありません。それよりも、イエスが神に委ねられたみわざを成し遂げるためには、イエスが処女から生まれることが必要だったからです。

処女から生まれたということは、イエスは原罪の影響を全く受けられなかったということになります。イエスは、私たちがアダムの子孫であるが故に受け継いでいる罪の汚れを、相続していません。この罪の汚れは自然な人類の進展によって受け継がれるものであるため、誰もが生まれながらにして堕落した人間性を持っています。しかしイエスは、奇跡的なみわざによってマリアの胎に宿ったため、この罪の汚れを受けなかったのです。イエスには、昔も今も罪がありません。罪を犯さないということだけでなく、原罪の影響さえも受けておられないのです。

教会は、キリストというお方について、二つの性質を持つ一人のお方であると理解しています。それは、イエスが人であり、神であるということです。受肉という奥義(mystery)は、神が神であるのをやめて人になったのでも、人が突然神になったのでも

ありません。受肉の奥義とは、三位一体の第二位格――とこしえなる神の御子――が神としての性質を一切失うことのないまま、人としての性質をご自身に負われたということです。イエスは人としての性質をマリヤから受け取りました。ですから、イエスは一人のお方でありながら、二つの性質を持っておられるのです。イエスは真に神であり、真に人であられます。

第五章　キリストというお方とそのみわざ（後半）

わたしは……イエス・キリストを信じます。
主は……ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、
十字架につけられ、死んで葬られ、よみにくだり、
三日目に死人のうちからよみがえり、天にのぼられました。
そして全能の父である神の右に座しておられます。
そこからこられて、生きている者と死んでいる者とをさばかれます。

使徒信条がこの部分に差し掛かると、内容はイエスの誕生からすぐさまイエスの受難、つまり十字架上での苦しみへと進められます。まるでイエスの誕生と死の間に何も起こらなかったかのような、急な展開にも見えるでしょう。特に新約聖書や初代教会がイエスの生涯に重きを置いたことを考えると、なおさらです。私たちの救いには、イエスの死だけ

でなく、イエスの生涯における完全な従順も大きく関与しています。イエスが十字架で人々の罪を背負う完全なるいけにえとなるためには、完全な従順が必要でした。それにもかかわらず、なぜ使徒信条ではイエスの誕生から一気にイエスの受難へと進むのでしょうか。

私たちはまず、初代教会において、キリストの受難が決してマイナスの意味合いを持つものではないことを覚えておかなければなりません。受難は福音の喜びのうちの一つなのです。例えば、キリストが十字架にかけられた日を「グッドフライデー（Good Friday）」と呼ぶのはなぜでしょうか。見方によれば、この日は世界中の歴史の中で最も暗い日であるはずです。しかし別の視点から見ると、この日は救いの日なのです。従って、使徒信条はここで喜ばしい二つのこと、つまりイエスの誕生とイエスの死との結び付きを示しています。イエスは死ぬために生まれました。それは失望の中に死んでいく悲劇の英雄の死でも、苦しみは避けられないと諦めて死んでいく者の死でもありません。むしろ、イエスの死は、私たちの救いのために定められたイエスの運命でした。

もう一つ、不可解に思えるフレーズがあります。「ポンテオ・ピラトのもとで」という部分です。使徒信条は、非常に簡潔な文章であるにもかかわらず、イエスの生涯において

ほかにも重要な人物がたくさん存在する中で、なぜポンテオ・ピラトの名前が挙げられるのでしょうか。中にはイエスの死に直接関わった人々もいました――弟子の一人であったユダはイエスを裏切りました。ユダヤ人の指導者の一人カヤパは、イエスを貶（おとし）める陰謀を企てました。この地方を治めていたユダヤ人の王ヘロデは、キリストに対するさばきに加わりました。なぜ、あまり知られていないローマの総督、ポンテオ・ピラトなのでしょうか。

答えの一つは、イエスがポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受けたと使徒信条が言うことによって、イエスの苦しみが世界史の舞台に置かれるということです。イエスは実在した人物でした。特定の地域で特定の時代に生き、実在した人々と関わりました。使徒信条がピラトについて言及することによって、歴史上のイエスという存在が裏付けられるのです。

もう一つの答えは、神が地球上の出来事を支配しておられるということに関連します。イエスの苦しみと死は、偶然ではありません。それは神の民を救うために、神のご計画の中にありました。神は悪しき者の罪深い意図をも用いて、その計画を成し遂げられます。人間の政治的権力に打ち勝つ神の主権が、ポンテオ・ピラトの名前に反映されているので

す。

しかしこの二点以外にも、さらに重要な要素があります。それは、旧約聖書がメシアは異邦人（非ユダヤ人）に引き渡されてさばかれると預言していたことです。イエスはユダヤ人によって殺されたのではありません。イエスはユダヤ人によってローマに引き渡され、ローマはイエスを送り返そうとしました。ピラトはイエスをヘロデに突き返し、ヘロデが再びピラトに突き返した結果、最終的なさばきは異邦人によって成されました。十字架という処刑方法でさえ、ユダヤ人のものではありません。イエスは、ユダヤ人由来の石打ちによる死刑ではなく、ローマの特徴的な処刑方法である十字架刑によって処せられたのです。

使徒パウロは、ガラテヤ人への手紙の中でイエスが死なれたこの経緯について重要視しています。彼は、旧約聖書の律法の下ではきよめの律法と汚れの律法があり、律法を守る者は祝福され、律法に背いた者は呪われるという定めがあることを取り上げています。この呪いとは、神のご臨在から切り離されることを意味しました。

旧約聖書の申命記には、「木にかけられた者は神にのろわれた者」であると書かれており（ガラテヤ人への手紙三章一三節、参照・申命記二一章二三節）、パウロはガラテヤ人

への手紙でも、イエスの死が十字架によるものであることに焦点を当てています。十字架刑は、木にかけられる、つまり十字架という異邦人の死の形態であるため、旧約聖書においては呪いの下にある死です。イエスが異邦人の死の苦しみを受けてくださったということは、イエスが私たちの呪いを受けてくださったということです。イエスは神のご臨在から切り離され、イスラエルを囲む壁の外で処刑され、異邦人に引き渡されました。

イエスが葬られたという記述もまた、旧約聖書の預言に結び付いています。預言者イザヤはキリストの受難と埋葬を預言しています。「彼の墓は、悪者どもとともに、富む者とともに、その死の時に設けられた。彼は不法を働かず、その口に欺きはなかったが」（イザヤ書五三章九節）。イエスは二人の犯罪者の間で処刑され、その死後、遺体はゴミの山に投げ入れられて燃やされたのではなく（ローマではそれが一般的な処理方法でした）、アリマタヤのヨセフという名の金持ちの男の墓を借りて、ユダヤ人として適切な埋葬をすることをピラトが許可しました。これらの出来事によって、メシアの死と埋葬に関するイザヤの預言が成就しました。

次のフレーズ、「よみにくだり」という言葉は、教会の歴史の中で多少の混乱を生み出しています。この言葉について、ある人々は、イエスの埋葬と復活の間にイエスの霊がい

た場所を示すと述べています。より良い読み方としては、この言葉を、イエスが十字架上で経験した霊的現実を指していると理解することでしょう。それはつまり、人々の罪の報いを受けたイエスは、十字架上で地獄に下ったということです。キリストが呪いを経験したのは、父なる神に見放され、最大限の神の怒りが注がれた、十字架の上だったのです。

そしてついに、使徒信条は復活に進みます。教会の初めの信条は、「イエスは主です」という告白でした。しかし初めに宣言された福音は、簡潔に、「イエスは復活された！」というメッセージです。キリストの復活なしに、キリスト教はあり得ません。使徒パウロが、コリントの人々に宛てた初めの手紙でイエスが死からよみがえられたことに丸一章を費やしていることは非常に重要なことです（コリント人への手紙第一、一五章）。ペテロは聖書のことばの成就、使徒とその他五百人の人々の目撃証言、そして彼自身の目撃体験に基づいて、細かな議論を展開しています。

パウロは、復活は非常に重要だと述べています。もしイエスがまだ死んだままなら、もしイエスが復活していなかったら、私たちは今も自分の罪に対して有罪であり、その責任を負う者であり、さらには、信仰も空（むな）しいものとなります。使徒パウロにとって、復活を排除することはキリスト教を排除することと同じです。もしキリストが復活していなかっ

たら、私たちに希望は無く、人生を無駄に生きることになるでしょう。復活は希望を与えます。なぜなら、復活は父なる神がイエスといういけにえを受け取ってくださった証(あか)しであり、罪からの救いと赦(ゆる)しがキリストを通して私たちに備えられたことを意味するからです。

復活はまた、人の最大の敵である死に打ち勝ったという点においても、大きな意味を持ちます。復活は、イエスだけに利益をもたらした、孤立した出来事ではありません。新約聖書はイエスの復活が多くの人々の最初のもの（初穂）であったと宣言しています。キリストに拠り頼む者は誰でも、イエスの復活に加わることが約束されています。復活によって、新しいいのちの希望が生まれたのです。

イエスが死からよみがえられたのは、地上での宣教をあと五十年続けるためではありませんでした。使徒信条は「主は……天にのぼられました」と証言しています。救いの歴史において、最も重要な瞬間がイエスの昇天で起こっています。キリストの昇天で、復活したイエスは王の王、主の主の座につかれました。これは、この瞬間、イエスが最高権力者の座につかれたことを意味しています。

初期のクリスチャンたちが世界を根底から覆した理由の一つは、誰が支配者であるか、

つまり誰が真の究極的な王であるかを、彼らが知っていたからです。イエスの弟子たちは、イエスが天に挙げられるのを見届けた後、大きな喜びとともにエルサレムに帰りました。彼らが喜ぶことができたのは、イエスがどこに行かれ、次に何が起こるかを理解していたからにほかなりません。イエスはただ去られただけではなく、権力者の座につかれました。従って、使徒信条でも昇天の後には「the session」（訳注―「座る」を意味する。教会会議などを指すが、ここではイエスが就かれた役職を指す）と呼ばれる言葉が続きます――キリストは神の右に座しておられ、力と権威と王権の位置に座っておられます。

それだけではありません。イエスは、至聖所（しせいじょ）、つまり御国の奥の部屋に入られました。イエスはそこで、神の民の大祭司として働かれます。旧約聖書の時代のイスラエルでは、ユダヤ人の間で年に一回、人間の大祭司が至聖所（しせいじょ）に入って、次の年に良いいけにえをささげるために、厳密なきよめの儀式を経なければなりませんでした。しかし、クリスチャンには完全なる大祭司がおられます。このお方は御国の宮の奥の部屋で、父なる神に絶えず、休むことなく、とりなしてくださっています。当然、弟子たちが喜んだはずです！

使徒信条はここでキリストについての告白を締めくくりますが、物語はここで終わらないことを最後に示しています――主はその場所から、再び来られるのです。そこから来ら

れて、生きている者と死んでいる者とをさばかれます。キリストに信頼を置く者は正しいと定められ、キリストに敵対する者、また神の民に敵対する者は、罰を受けます。キリストは王であり、祭司であり、世界をさばかれるお方です。

第六章　聖霊と教会

わたしは聖霊を信じます。きよい公同の教会、
聖徒の交わり……

使徒信条は三位一体を意識した信仰告白です。つまり、神が三つの位格――父、子、聖霊からなる存在であられることを明確に認識しています。三位一体という概念は四世紀ごろまで完全に成り立っていなかったという説もありますが、三位一体の神に対する信仰は初めから明確に認識されていました。使徒信条では、父なる神とイエス・キリストへの信仰を確認した後、三位一体の告白を次の簡潔な宣言で締めくくっています。それは、「わたしは聖霊を信じます」という告白です。

私たちが理解すべき最も重要なことの一つは、聖霊とは位格（person）であり、非人格的なエネルギーや力ではないということです。言い換えれば、聖霊は「it（物）」では

なく、「He（人）」です。聖霊は人格を持つ存在、つまり、人と人との関わりと同じように相互関係を持つことができる存在です。

三位一体なる神に属する御霊は、天地創造にも関わっていました。しかし、御霊において最もよく知られている役割は霊感（inspiration）でしょう。御霊は聖書の中で、真理の御霊として知られています。預言者たちのもとに現れたのも御霊であり、彼らが神の真理を語ることができるように働きかけました。また聖書のことばが書かれたのも、聖霊の霊感と監督によるものです。

クリスチャン人生は、聖霊の働きかけによって始まります。聖霊が心を造り変え、神を求めるものとなるよう死んだ魂を生き返らせます。これを「新生」と呼びます。クリスチャン人生が聖霊の力によって始まるように、クリスチャン人生における成長の過程もまた、御霊の力によって実現していきます。この、信仰が成熟するための恵みによる成長の過程を、「聖化」と呼びます。聖化の中で、クリスチャンは新約聖書で「御霊の実」と呼ばれる実りを見せるようになります。これは、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」という実です（ガラテヤ人への手紙五章二二、二三節）。

しかし、御霊の働きには、さらに検討する価値のある一面があります。新約聖書で、イ

エスが弟子たちに御霊の降臨について語るとき（ヨハネの福音書一四―一七章）、イエスは御霊を「助け主」と呼んでいます。ただし、新約聖書は御霊について単なる「助け主」とは紹介していません。御霊は、「もう一人の助け主」と呼ばれているのです。この言葉に当てはまるギリシャ語の原語は、時に「慰め主」または「助言者」と訳されます。では、イエスが「あなたがたにもう一人の助け主を遣わします」と言われたとき、一人目の助け主は誰なのでしょうか。もちろん、イエスご自身です。イエスが不在の間、イエスはもう一人の助け主、聖霊を送り、聖霊はクリスチャンの人生においてイエスのご臨在を引き継ぐ役割を担うのです。

「助け主」または「慰め主」という呼び名は、聖霊が私たちに寄り添い、痛みや悲しみを共に感じてくださる存在であることを思わせます。実際、聖霊の働きの一つは、私たちが誰かを亡くしたとき、または困難や悲劇の中にあるとき、私たちを慰めることです。しかし、イエスはそのような意味でこの呼び名を用いられたのではありません。イエスが用いられたギリシャ語の言葉は、問題が起こったときに駆けつける弁護人を意味する呼び方でした。イエスは、戦いや争いや困難の真ん中で、クリスチャンと共に立つ者として御霊を遣わされたのです。このような慰め主は、私たちに力をもたらし、私たちを強めてくださ

るお方です。イエスは、私たちの味方となり励ましとなる存在として、聖霊を約束してくださったのです。

御霊がクリスチャンの人生に働きかけるとき、御霊は常に私たちを共同体へと導きます。新約聖書は、イエスを信じる者を「聖徒たち」と呼びます。この言葉は「聖なる」と訳される言葉と深い関係を持ち、イエスを信じる者は特別な使命（目的）のためにきよくされていること（set apart）を指します。彼らは純潔で正しいから、または神と同じように聖なる者であるから「聖徒たち」と呼ばれているのではなく、聖霊が内に宿り、聖霊が彼らをきよくし、一つのからだとして建て上げてくださるから、そのように呼ばれるのです。この意味で「聖徒たち」と呼ぶ場合、ある人が他の人よりきよいとか、優れているとか、奇跡を起こすことができるとかといった意味は持ちません。新約聖書によると、すべてのクリスチャンは聖徒です。なぜなら、彼らは皆、聖霊の内在を受け、きよくされているからです。

私たちの贖いは個人的に与えられるものです。私たちは、様々な種類のグループに個々のメンバーとして属しています。しかし最終的に私たちが神の御前に立つときは、私たちは一人です。信仰は私のものであり、イエス・キリストを信じ信頼しなければならないの

は私自身です。しかしこれほど救いが個人的なものである感覚があるにもかかわらず、キリスト教は個人主義を教えません。むしろ、クリスチャンはそれぞれが信仰の交わりに加わること、つまり私たちが呼ぶところの教会に属するよう招かれています。使徒信条はこれを、きよい公同の教会と証言しています。ここで言う「教会」とは特定の教派や地域の教会ではなく、世界中どこででも、クリスチャンの集まり全体を指します。

今日において、必ずしもきよいとは言えない機関があるとすれば、それは教会です。教会は堕落した機関です――しかし、世界中で最も重要な機関なのです。地獄の勢力もそれを理解し、イエス・キリストの教会を真っ先に霊的攻撃のターゲットにします。ただし、教会はキリストの保証が与えられている唯一の機関でもあります。教会のメンバーは必ずしもきよいとは言えませんが、教会は実に罪人の益のために整えられた組織です。

教会のメンバーがきよくないとしても、教会はきよいのです。なぜなら、イエス・キリストがそのかしらであられるからです。イエスこそ、「わたしは……わたしの教会を建てます」と言われたお方です（マタイの福音書一六章一八節）。ですから、教会が存在するのは、キリストによって招かれたからであり、聖霊の賜物と内在を受けているからであり、私たちが教会のきよめのみわざを受けているからなのです。私たちが受けるきよいものは、

初めに教会を建て上げた力と同じ力――イエス・キリストと聖霊の力――によって与えられています。キリストは、すべてのクリスチャンがキリストの教会に加わるよう任命し、招かれ、聖徒たちが集まることを怠ってはいけないと教えられました。キリスト教の信仰に関しては、離れ孤島になるべき人は一人としていません。私たちには誰でも、教会に集う義務があり、同時にその特権があるのです。

使徒信条は「きよい公同（catholic）の教会」に対する信仰を宣言しています。これは、ローマ・カトリックの教会のことではありません。「公同の」とは「普遍的な」という意味を持ち、神に属する人々がいるところはどこでも教会が存在することを意味します。プロテスタントのクリスチャンたちがこのことを覚え、使徒信条として今も告白しているのは、ローマ・カトリック教会を受け入れていないとしても、私たちの属する教派や地域の会衆よりも大きく、広く、深く、幅広い、普遍的なキリストのからだが存在すると確かに信じているからです。

「聖徒の交わり（the communion of the saints）」は、普遍的な公同の教会を説明するもう一つの表現です。これは、時に「Communion」と呼ばれる、聖餐式や聖体（ユーカリスト）などの聖礼典を指すのではありません。使徒信条での「聖徒の交わり」とは、世界

中のクリスチャンからなる、聖霊によって結ばれた交わり、兄弟関係のことです。この交わりは、教派の違い、地理的な距離、民族間の境界を超え、さらには一次的な隔たりをも超える交わりです。

これはつまり、今日のクリスチャンたちは何らかの形で、何年も前、もしくは何世紀も前に生きたクリスチャンたちとの交わりの中に置かれているということです。信仰者たちは、確かに、今まで生きてきたすべてのクリスチャンとの交わりの中にあります。なぜなら、クリスチャンは誰でも、キリストによる信仰によって一致し、その一致は時間にも死によっても壊されることがないからです。この一致ゆえに、一人ひとりのクリスチャンは、共にキリストの一致にある兄弟姉妹と互いに神秘的に結び付いているのです。

第七章　罪の赦し、復活、そして永遠のいのち

わたしは……罪のゆるし、からだのよみがえり、
永遠のいのちを信じます。
アーメン。

私は度々、弁証学を語る上で、神を信じない、またはイエスを信じないと主張するノンクリスチャンの方々と議論を交わすことがあります。そのような場で、たとえ教養のある哲学的な議論が展開されたとしても、私の決め手の一つはこのごくシンプルな質問を投げかけてみることです――「あなたはご自分の罪についてどうされるのですか」

今まで一人として、まっすぐ私の目を見て「私には罪などありません」と言った人はいません。誰にでも罪はあり、そして誰でもそれを感じているのです。罪は現実的で客観的なものです。私たちは罪悪感という感情と、客観的な罪の状態とを分けることがあります

が、これらを混同してしまうこともあります。中には、罪悪感を感じないから、自分に罪は無いと結論付ける人もいるかもしれません。しかし、法廷では、殺人の被告人が罪悪感を感じていないことだけを主張したとしても、弁護はあまり上手く進まないでしょう。罪責とは、基準と法律との客観的な関係性を指します。私たちが神の律法に背くとき、私たちは罪責を負います。それが人々の抱える問題を生み出すのです。

聖書は、すべての人間が神の御前に自分の人生の申し開きをしなければならないことを教えています。このさばきという中心的な要素が不明瞭のままでは、私たちはイエスの説教や教えを完全に理解することはできません。そもそも、イエスが受肉した神としてこの地上に来られたことによって、さばきの危機がもたらされました。ですから、イエスは人々に、最後の審判に備えよと繰り返し警告しています。「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら何の益があるでしょうか」。イエスは問いかけられます。「そのいのちを買い戻すのに、人は何を差し出せばよいのでしょうか。人の子は、やがて父の栄光を帯びて御使いたちとともに来ます。そしてそのときには、それぞれの行いに応じて報います」（マタイの福音書一六章二六、二七節）

イエスはこの最後の審判について、私たちの隠れた行いがすべて明らかになり、あらゆ

る不注意な言葉もさばかれることなど、実に恐ろしい言葉で語っておられます（マタイの福音書一二章三六節）。つまりは、私たちの言うこと、考えること、やることすべてに対して、精算を迫られるということです。私たちはそれを先延ばしにしたり否定したりすることはできますが、審判から逃げることはできません。

すべての人間は自分の生き方について創造主に責任を持ち、申し開きをしなければならないという考えは、聖書の教えの根幹をなすものです。ダビデ王はこう言いました。「主よ　あなたがもし　不義に目を留められるなら／主よ　だれが御前に立てるでしょう」（詩篇一三〇篇三節）。これは修辞疑問文ですから、答えは明らかです。もし神が私たちの罪を記録しておられたら、誰一人として神の御前に潔白な者として立つことはできません。もし私が神の律法、神の正しさ、神のきよさの基準、そして義の純粋なる基準に基づいて神のさばきを受けるとしたら、私は滅びるほかないでしょう。

実際、新約聖書が最後の審判について語るたびに、人々が同じ反応を示している様子が描かれています。それは沈黙です。誰かが他の人を訴える場合、たとえその人が罪を犯していたとしても、普通の人間の反応としてはそれに対して抗議したり、自分を守ろうとしたりするものです。私たちは言い訳をし、その行動の理由を説明したり、自分がしてしま

ったことの深刻さを最小限に抑えようとしたりします。しかし神の御前に立つとき、私たちは人生で初めて、自分のしてきたことに対して完全かつ絶対的な評価を得ることになるのです。それに対して抗議することは意味がなく、断じて愚かなことです。なぜなら、その証拠はあまりに圧倒的で、弁護する言葉も全く不十分だからです。

この罪の重荷の故に、私たちが最も必要としているのは赦しです。そして、良い知らせは、神の義の基準に従わなかった人に、神との正しい関係を回復することができる道をキリストが備えてくださったということです。この正しい関係は、罪の赦しによって実現する神との和解と義認です。

クリスチャンは、神に近づき自分の罪を告白するとき、神はそれを赦してくださると信じています。これこそクリスチャン人生の喜びです。神が「あなたの罪は赦された」と言ってくださるとき、神は私たちの罪をもはや忘れてくださいます。キリストにある者について、使徒パウロはこう言っています。「こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」（ローマ人への手紙八章一節）。これは私たちが神の審判やさばきを受けなくてよいという意味ではありませんが、キリストにある者は、神の怒りによる有罪宣告を受けることは決してないということです。クリスチャン

は、癒やされ回復された創造主との関係を永遠に楽しむことができます。これこそ、人間が経験できる最高の恵みであり、祝福です。

神は私たちの魂を回復させ、心に平和をもたらすことを約束されますが、それだけではありません。神は私たちに新しいからだを約束してくださいます。私も、「このからだはもう年老いた、新しいからだが欲しい」と、考えることがあります。神は、私たちが復活を迎えるとき、新しいからだが与えられると言われます。それは、死ぬことも滅びることもない、栄光に満ちたからだです。そのからだには痛みも病も、腐敗も死もありません。

使徒信条の「わたしは……からだのよみがえり……を信じます」という言葉は、キリストの復活のことだと考える人もいます。そうではありません。ここで言っているのは、私たち自身のからだです。キリストを信じる人は、キリストの復活によってもたらされる、からだの復活を経験するのです。

偉大な数学者、哲学者、そして神学者であったブレーズ・パスカルは、人を「至高のパラドックス（逆説）」と呼びました。彼は、人は最も気高い生物でありながら、最も惨めな生き物である、と言います。人の気高さは観察し熟慮する能力にあります。しかしそれが、惨めさの根源でもあるのです。人はいつでも、現在楽しんでいる姿または到達できる

であろう姿より、さらに優れた存在を思い描く能力を持っています。私たちは常にかなえられることのない願いを抱きながら生きているのです。私は痛みや苦しみ、そして死の無い人生を想像することはできますが、実現させることはできません。自分の夢や希望を未来の姿に投影すること、それこそが宗教の基本だと言う人もいます。

しかし、聖書が教えているのは願望充足ではありません。イエス・キリストが死に打ち勝ち、罪が赦(ゆる)されたために、私たちのからだがよみがえる時が来ると、主は言っておられます。キリストに信頼した者は永遠のいのちを得、主は私たちの目からすべての涙を拭い去ってくださると言われます。そこには痛みも悲しみも無く、死も罪もありません。あなたも、このいのちが欲しいと思いませんか。私たちは誰もが罪に定められており、従って誰もが受けるべきは永遠の処罰です。聖書は私たちに、「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができ」ないと告げています（ローマ人への手紙三章二三節）。しかし、私たちの罪を取り除き、私たちに永遠のいのちを与えてくださる救い主が来てくださいました。このお方の罪の贖(あがな)いのいけにえが私たちの罪を洗い流してくださいます。福音は、あなたのための良い知らせです。もしあなたがこの救い主をまだ信じていないなら、あなたの罪の赦(ゆる)しのために、このお方に信頼してみませんか。

キリスト教信仰の軸は、福音です。福音があなたに求めることはただ一つです――イエス・キリストに信頼し赦しを得るか、この福音を無視または否定するかです。福音を無視することは、つまり否定することと同じです。福音は、使徒信条のすべての項目に関わる、罪の赦しから始まります。全能の父なる神が、天と地を創造され、ご自身の御霊を処女に遣わし、子を授けました。この天と地を支配される神が、御子をポンテオ・ピラトのもとでさばきに耐えさせました。それはイエスが十字架にかけられ、死んで、葬られるためでした。それによって、イエスはよみにくだり、死からよみがえり、天にのぼられました。それによって、今イエスは神の右に座しておられます。そしていつの日か、そこから戻ってこられて、すべての人をさばかれます。あなたはその日に、キリストに信頼する者として赦しといのちを得られると認められるでしょうか。それとも、罪の赦しについてイエスに信頼することを拒んだ一人として、永遠の処罰を受けることになるでしょうか。イエスを信じることによって、赦しが与えられます。イエスは聖霊を遣わしてくださったお方であり、教会と呼ばれる共同体をつくられたお方であり、私たちによみがえりのからだと、永遠のいのちを約束してくださるお方です。

リゴニア・ライブラリー

リゴニア・ミニストリーズは、一九七一年にR・C・スプロール 博士によって設立された国際的なキリスト教信徒教育機関で、聖なる神をより多くの人々に宣べ伝え、教え、守ることを目的としています。リゴニア・ライブラリーのしるしは世界中の国々で、また多くの言語において、信頼の証しとなっています。

キリストによる大宣教命令を胸に、私たちは信徒教育のためのリソースを書籍出版および電子フォーマットでの出版を通して世界中に発信しています。信頼を得ている書籍やコラム、ティーチングシリーズの動画は四十以上の言語に翻訳・吹き替えがなされています。私たちの願いはイエス・キリストの教会を支えること、そしてそのためにクリスチャンが何を信じ、なぜそれを信じ、それをどのように生き、どのように分かち合うかを知ることができるよう助けることです。

編　者

Ｒ・Ｃ・スプロール

Ｒ・Ｃ・スプロール博士はリゴニア・ミニストリーズの創設者であり、フロリダ州サンフォードにある聖アンドリューズ・チャペルの創設牧師、Reformation Bible College の初代学長であった。また、The Holiness of God をはじめとする百冊以上の著書がある。

訳　者

楠　望（くすのき　のぞみ）

一九八四年、大阪府生まれ。ニュージーランドで過ごした学生時代にＲ・Ｃ・スプロール博士のティーチングを通して改革派神学に出会い、神学書の翻訳を志す。二〇〇一年米国カリフォルニア州 Westminster Seminary California にて聖書学修士号（MABS）を取得。訳書に『ニューシティーカテキズム　デボーション集』（CBI Press）がある。

聖書 新改訳 2017© 2017 新日本聖書刊行会

信仰というレース
――使徒信条から学ぶキリスト教入門

2021年 7 月 1 日電子書籍発行

著　者　R・C・スプロール
訳　者　楠　　望
発　行　いのちのことば社

〒164-0001 東京都中野区中野2-1-5
TEL03-5341-6923／ FAX03-5341-6925
e-mail:support@wlpm.or.jp
http://www.wlpm.or.jp

Japanese Translation Copyright©Nozomi Kusunoki 2021

あなたはどのレースを走っていますか？

あなたの人生において、一番大切なゴールは何ですか？それは本当に追求する価値のあるゴールですか？この目まぐるしい世界の喧騒に囲まれている私たちは、綺麗ごとや無意味な目標（ゴール）に気を取られ、真実で永遠のものに目を向けることを忘れがちです。この
小冊子では、R・C・スプロール博士は私たちの人生で最も大切なレースについて述べています。それは、信仰のレースです。著者がクリスチャン信仰の意味を強調し、勝利への道を指し示す中で、あなたがどのように人生を費やしているか、そして永遠のいのちに向かってレースを走っているかどうかを考えるきっかけになることを願っています。

いのちのことば社
WORD OF LIFE
リゴニア・ライブラリー